

4月25日 1996・No.94

東京都印刷工業組合京橋支部
 〒104 東京都中央区新富1-16-8
 日本印刷会館3F 電話 3552-1855
 FAX 3297-3790

発行人
 荒川龍治

組合に結集しよう

支部長 荒川龍治

「心技体をもって支部運営を計る」、「厳しい時こそ組合に結集すべきである」ことを標榜して支部役員共どもその運営に当り、組合員の皆様にご理解を頂きながら、多大なるご協力とご支援を賜り、任期を全う出来ましたことは真にありがたく、ここに心より感謝申し上げます次第であります。

二十世紀最後の十年、九〇年代に入り世界も日本も政治、経済そして社会の分野で制度と構造が激しく変革する中であって、我々印刷業界に於いては、更に厳しい環境の中にあります。このような時代にあつて、「組合は何をなすべきか」というその使命について常に思考し運営を心がけて参りました。

第一に組合に結集することにより、業界を同じくする者同志が連帯感を持ち、それが結束してひとつの力となり、我々の立場を鮮明にし、考えるところを正々堂々と主張すべきであり、第二には、今や近代社会に於いて最たる情報産業の要である印刷産業に携はるものとして、その伝統を誇りとし、それ故に社会的使命を果す責務のあることを自覚することであり、第三として、情報の発信と、それを組合員各々が選択し威力とすべく工夫する機会を提供することであると考え、努力してまいりました。これからも、支部組合員の皆様とともに組合が機能する為には、上昇志向ではなく、向上心をもって積極的に参加し努力して行かなければならないと考えています。

申し上げるまでもなく、上昇志向とは、今よりも良い状態になることを概念的に考えているのであり、それに比べて、向上心とは、上に向って進む、より優れた状態に達しよう、既ち進歩しようとする意志であります。

ここ数年に亘り、時代を反映してか組合を脱退する方々が後をたたず、その中に、参加しているメリットが無いことを理由とする事例が多く見受けられますが、大変残念なことであります。しかし、メリットは与えられるものではなく、自ら得るべく努力し、工夫することではないでしょうか。また、そういう機会を持つことがメリットではないでしょうか。

これから迎えようとする二十一世紀は複雑、流動的かつ不透明な時代であり、成熟化と高齢化社会となる日本は累積した膨大な財政赤字と相いまって、増々厳しい時代が続くものと予想されています。

かつて、一地方都市の地場産業が、地元への利益誘導を専らとした政治家による行過ぎた助成を受け繁栄を甘受していましたが、その人の死と共に、助成が打ち切られるや、壊滅的な打撃を受け、今や海外にその生産の大半をとって代られたことをおもうと、お互に知恵を出し合い、厳しさに耐え、自らの事業を維持発展する工夫をして行くべきではないでしょうか。

マックス・ウェーバーの名著「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中にも、ヨーロッパに於いて、宗教の支配がきわめて楽な、比較的形式に過ぎないようなカソリックの人々よりも、公私共にはるかに厳しい規律を要求するプロテスタントの人々の方が近代的企業に於ける資本所有と経営的地位をより多く占め、また高等教育を受け高級労働にかかわりをもつものの数がかわめて大きいという事実が述べられています。

このように厳しさを糧として、技術革新によって構築されつつある新しい時代に活躍することを志す為にも「組合は共に栄える工夫と情報の発信地」のテーマが意とするところを十分に理解し、組合に結集することこそ、新たな時代に先駆る出発点となることと確信いたしております。

新年臨時総会

2月2日・
築地スエヒロ別館

2月2日(金)午後6時より、築地スエヒロ別館に於いて、東印工組京橋支部新年臨時総会が開催されました。

当日は、午後4時からの地区長会に続いて、総会は十文字副支部長の司会により開会され、開会のことばを関根副支部長が、続いて荒川支部長の挨拶では「不況になって60ヶ月過ぎた。不況というよりも、これを一つの新しい時代ととらえた方がよさそうだ。京橋は近代印刷発祥の地であり、印刷業界を発展させなければならぬ使命がある。好況になるのを心待ちにするのではなく、状況がきびしいときこそ、結束し、知恵を出しあって、新しい時代に対処しなければならぬ」との挨拶がありました。

続いて議事として、次期役員選考委員会経過報告を石澤委員長が行い、「2回開いた選考委員会、人格、識見ともにすぐれかつ支部運営に精通している十文字さんを次期支部長候補として推薦することを満場一致で決め、内示を受けてもらった。副支部長、監査については、各地区の意向をふまえて、定時総会までに推薦する」と説明、原案どおり承認された。

次いで新規加入支部員の紹介(南丹保クリエイト、(有)ティエムピー、(株)ユニットプランニン



グ)ならびに新任書記(岩本書記の後任横田書記)の紹介があったあと、来賓の田島東印工組副理事長、矢田中央区長、平林中央区工団連会長のあいさつがあり、山崎副支部長の閉会のことばで総会は終了しました。

午後7時からは、関連業界より39名の方々のご出席をいただき、中島副支部長の進行のもとで、関連業界代表挨拶は東製工組京橋支部長の岸田支部長があいさつされました。続いて、当支部石澤顧問が乾杯の音頭をとり、一同乾杯をして賑やかに歓談となりました。宴半ばでは平林工団連会長の「浪曲三題」のご披露があり、8時過ぎには小山常務理事による中締があつて、宴会もお開きとなりました。



次期役員選考委員会報告を行う石澤委員長

新春研修会

躍進するアジア諸国と日本

講師・シンガポール大使 内田勝久殿

京橋支部「新春研修会」は一月一八日(金)外務省大使(国際貿易・経済担当)の内田勝久大使をお招きして「躍進するアジア諸国と日本」と題して、組合員七七名参加のもとに、開催しました。

講演にさき立ち荒川支部長より、次の様な挨拶がありました。

「皆様明けましておめでとうございます。年の始めに大変ご多忙のところ、支部組合員の方々をはじめ多数御出席頂きましたことを、厚く御礼申し上げます。また、公務大変ご多忙のところ、二月早々にシンガポール大使として赴任されます内田大使に、貴重なお時間を割いて頂き厚くお礼申し上げます。

さて、私たちを取り巻く環境は大変厳しく、昨年特に多事多難でございました。今年は新年早々に橋本内閣が誕生し、まさに新たな年が期待を以って開かれた訳でございます。しかし私どもは昨年来大変厳しい状況が続いております。また、私たちの国全体が今一つ活性化しております。また、私達の業界としましては、技術革新が日々進んでおりますが、その一方で、昨年春よりの印刷用紙の値上げという大きな問

題、と申しますか試練に直面しております。

しかし、これも考えてみますと、決して日本だけの問題ではなく、世界的な経済の仕組みの中に、そういう問題は起きております。特にアジア諸国の発展とも無縁ではないという説明もされておりますが、この点につきましては皆様もご承知のことと思います。

アジア諸国の開発途上国といわれた国々も、大変経済発展が目ざましいものがありまして、印刷用紙の需要も大変大きくなっております。

ですが、発展に伴いまして自然環境保護という意識も大変強くなりました。従ってチップの原木不足などもあり、値上げも止むを得ないという一つの説明もあります。そんな中、昨年十一月に A P E C の大阪会議が開催されましたが、その会議を担当されました内田大使に本日はご出席いただきまして、発展するアジア諸国と日本との関係において、日本経済がどのように推移していくのか、また、我々の事業の発展にどのような影響があるのかをお伺いして、今後の事業運営に役立てていきたいと考えております。是非皆様には実りのある研修会であってほしいと願っております。

〔内田大使講演抜粋〕

本日は過去一年間 A P E C を担当しておりました。それを通じて、アジアは今後どのように推移発展していくのかということをお話ししまして、皆様のご依頼にお応えしたいと考えております。



イスラエルにおります時も、今回赴任しますシンガポールにおきましても、案内状や名刺というものは、日本で作る、印刷すべきだというお話しを伺いました。また、印刷技術と文化のレベルは比例するという話も聞いたことがありますが、それでも、何れにしてもシンガポールではまだまだ時間がかかると思われます。

しかも、シンガポールは金融や情報通信、科学などのレベルは日本並み、また、ある部分では追い越しているものもあるかも知れません。アジアの経済発展は、先づ 60 年代に日本とア

メリカが先行しまして、その後をシンガポール、韓国、台湾、香港といった国が次のグループとして続き、それからASEAN、中国、またベトナムといった国々も入り、今ではその経済発展のグループは、インド、パキスタンにまできております。

その一つ一つがグループを形成し、先行するグループが軽工業なら軽工業をやつて、それを卒業すると次のグループが軽工業をし、その後続グループもやるという風にどんどん進んで行く、そういう形で東アジア諸国の経済成長が進んで来て、国際競争力をつけて来ています。

これを我々は、鳥の雁が群れをなして大変なスピードで進むような、ということで「雁行的な発展」と云っております。

その中で分野よつての分業、或いは相互依存関係、それが工^{タテ}まずして成立する、そういう土壤を持つております。ですから、いわゆる南と北、先進国と後進国との関係といったものはアジアとは無関係だと私は思っております。

そういう上^{タテ}手く分業が進んでいる、それをベースとした経済発展というのが、80年代から年率8%という大変なスピードで成長しているこの地域の大きな特徴ではないかと考えております。

日本を除いて、一時期は「躍進」ではなく、「低迷」するアジアでありました。ラベートや中近東、アフリカと比べても近代合理主義というのがアジアの伝統、あるいは因習というものがあるのを埋めさせ、なかなかアジアには根づか



ないと云われた時期もありました。

それがこのような大きな変化を遂げたというのは、色々理由はありますが、私は色々な意味で儒教の影響ですとか華僑を中心とした商業資本というものが、除々に蓄積されてきたのだと考えております。華僑というのはまた、教育のレベルも非常に高い。マレーシアですとかインドネシア、ボスレムなどには華僑の人口が大変多く、日本に於いても儒教の力というものが、現在の発展に大きな影響を与えてきた、そういったものが現在東アジアに起つてきているものではないか、と考えているのです。

(中略)

私は一時期大平総理のところで総理の補佐官

というものをやつておりましたけれども、このアジア太平洋協力というものは、その時の大平さんの出した環太平洋構想、要するにアジアを結ぶ国々が協力していかなければ日本の将来は考えられない、ということをも、大平さんが元々云い出した訳ではありませんけれども、その周りの学者、色々な議論がありましたし、豪州でも非常に強い議論、豪州はヨーロッパからフレれちやつて、アジア太平洋の中でしか生きていけないという意識がその頃から非常に強くなつたと思います。

それが大体80年代の初めてでして、80年代はほぼ半分子的な研究で、政府も若干絡んでおりましたけれども、政府レベルでの交渉というのは、このアジア太平洋ではありませんでした。89年になって初めてこのAPECというものが、これも豪州、日本では外務省も絡んでおりましたけれども、通産省が非常に強くこの構造に力を入れました。

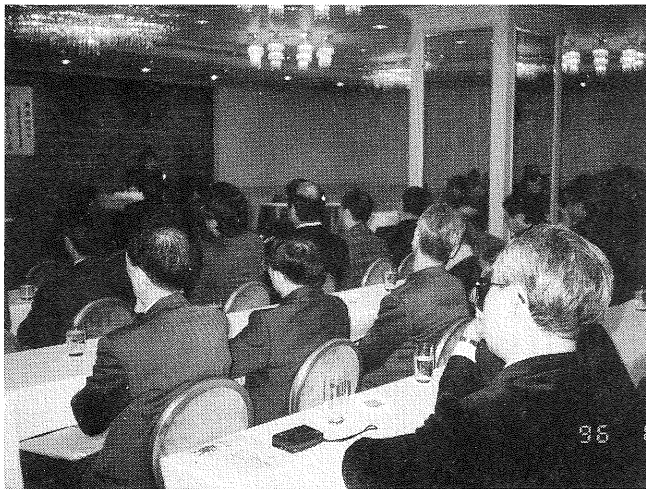
外務省というと、役所なんですけれども「まだアジア太平洋と云つたつて、アメリカがいて日本がいて、それから訳の判らない国がたくさんいて、そんなところに一つの共同体だとかフォーラムを作ると云うのは、とても時期尚早である」と。しかし世の中というのは我々が考えているよりも、もっともつと早いスピードで進むものであります。ベルリンの壁が壊れたとか、そういうところに脱線し始めるとキリがありませんけれども、何れにしても大変なスピードで進んでまいりまして、89年にAPEC

の閣僚レベル、政府レベルでの一つの対話の機会として定着しまして、これが93年になりますと、クリントン は自分の国で閣僚会議をやる機会に「しめた」と云うことか、クリントンさんの政治的な思惑もあつたんでしょう、矢庭に18の国と地域のリーダーを全部呼びつけて、ここでAPECは首脳レベルにまでレベルアップされた訳です。(中略)

(APEC大阪会議では)

具体的に何をされたのかは申しませんが、結論を先に申し上げれば、大阪のAPECは大変な大成功でありました。私自身も、どうせ最後の一日や二日は徹夜になるのだから、それなりのエネルギーを確保して大阪入りしたのですが、首脳が集まる頃には全ての問題が結着しておりまして、少々拍手抜けしたというのも事実であります。

それは何故か。これはやはり、手前味噌になりますけれども、本当に高級事務レベル会合の中で全ての議論は出尽した、もうとことん議論をした。そういう意味では事務レベルの圧勝だったと思います。もちろん、アメリカやASEAN、中国の考えかた色々ありまして、議論さえすれば問題が解決するという訳ではありませんが、ともかく皆に「もうこれ以上議論してもしようがない」と思わせるまでやりました。これは日本でなければ出来ないことだと思えますけれど、それである部分では「玉虫色」なものでありましたが、何れにしましても上手くいきました。ただ、あまり事務レベルで



上手く行つたと申ししておりましたら、私の麻布の一年先輩である橋本総理から「おい内田、何を云ってるんだ。これは村山総理のリーダーシップでここまで来たんだから、日本の政治的リーダーシップの賜物でこの大阪会議は成功したんだ」と云われまして、そういうものかな、と思ひまして、それからは日本の政治的リーダーシップのお陰で、このAPECは成功したのだ、と云うようにしております。

中身は今申しました通りで省略いたしますけれども、二、三、どういふ議論をしていたのかということ、これからのアジアを考える時に

大事だと思ふ点をご紹介したいと思います。

一つはAPECは、二〇一〇年とか二〇二〇年までにAPEC地域を自由化する(ボゴール会議で採決された)ことについて、これは一体何をしようとしているのか、APECは何処へ行くのか、ということでもあります。APECが今のヨーロッパのような経済統合のようなものを目指しているのか、ということであるが、一時期我々の議論では「これは何か素晴らしいものを作るんだ」ということで、ヨーロッパの統合と同じくアジア太平洋地域で一つの経済共同体を作るのだという勇ましい議論をしていた人もいましたけれど、少し真面目に考えてみますと、アメリカと中国が同じ関税もない経済貿易政策を採ってやっていくような一つの地域を作るなど、土台無理な話でありまして、結局自由貿易の地域を作るのでなく、経済統合するものでない、何の為に自由化をこれからやるのか。これはGATTの難しい議論になりますけれども、自由化をやっている時に、自由化というのは関税を自分たちの地域の中で自分たちで下げる、他にも色々なことがありますけれども、具体的には関税を下げていくことをやるのは良いがそれをやって、一つにはヨーロッパの場合には自分たちの関税を下げて、いわゆる「タダ乗り」する連中はどうするのか、という議論が一つ。

もう一つ、それでは「タダ乗り」をさせないためには、一つのブロックを作って、EUなど

はフランスとドイツの間では無税の物も、日本から同じ製品が入れば、ちゃんと EU はドイツもフランスも税金を取り訳ですから、それではそういうものを作れば良いかというと、先程申しました通り、とてもこの広い地域でそういうものを作ることは出来ない、ということでありまして、結局我々は、A P E C で「コード C」という立派な、今後の自由化へ向けてのプログラムを採択しましたが、それをどの様に実施していくか、良く判りません。

(中略)

A P E C の概要はそういうことでありますが、日本にとって A P E C というのはどういうものなのか、アジア太平洋外交と云いますか、日本の関係の中でどういう位置づけになるのか、ということについて申し上げたいと思います。

まず一つは、アメリカの方もこのアジアに対する関心は非常に強く、アジアもアメリカ無しでは生きていけないという、そういった土壌がある訳でありますけれども、私はやはり日本の外交が置かれている難しい問題の一つは、日本はアジアに軸足を置いているのか、アメリカを代表する欧米諸国に軸足を置いているのかどちらなのか、ということが問われてきました。

ある時はアジアに傾斜し、ある時は欧米に傾斜するという具合に上手に使い分けてきたのですが、この A P E C というのは、同じ場所にアジアも入っていて、アメリカも入っています。その中で日本が整合性のある外交、振る舞いが出来るのかどうか、要するに日本外交の中でア

ジア外交や欧米外交というものが、二者択一ではなく融合できるのか、ということが問われた大変チャレンジングな場であったし、これからもそう有り続けると思います。

日本にとってはアジアもアメリカも大変大事なのですが、私が申し上げたいのは、その中で特にアジアだけに軸足を置くべきであるという考えの一つの学習が、いわゆるマレーシアのハティールと言っている E A E C という、イースト・アジア・エコノミック・コーカスと彼は言っていますけど、むしろ A P E C よりも A S E A N の六ヶ国、今度ベトナムが入りましたので七ヶ国と、日本、中国、韓国と、この十ヶ国でコーカスを作り、それが中心となって議論する。これは A P E C の中のサブグループだということ言い方をしたり、また A S E A N を拡大したものととして、アジアの中核を成すなど色々な言い方をしておりますが、アジアだけでまとまっていこうという試みであります。

アメリカはこれに大反対をしております、しかもマレーシアのマハーティール首相は、E A E C を何となく黄色人種の団結が必要だとか、そういった人種的な発想を滲ませた説明をした時期もあつたものですから、益々アメリカはこれに抗議・反対をしております。

我々はこの E A E C に豪州、ニュージーランドを加えれば、だいたいアジアの E C 的な併合をした一つのグループとして、かつ人種的な意味合いが無くなるのではないかと申し上げたのですが、マレーシアはこれに反対をしております。

す。

そういう不幸なスタートでありましたが、日本はアジアも大事ですから、中々この E A E C に対して N O とは言い切れず、今はまだ検討しているところです。

先程から申し上げております通り、太平洋を越えての貿易関係というものが、やはりアジア発展のベースになっておりますので、私は経済に関する限りは、まずこの E A E C ではなく、A P E C というものをまず育てていく、まずそこにしっかりとした、A P E C の地盤を築いて、その上でアジアの中で何が出来るか、豪州、ニュージーランドを含めて何が出来るか、ということを考えて行かなければならない、そういった意味での重要性といったものが、この A P E C には非常に強いと考えている訳であります。

アメリカを引きつけておく、アメリカとアジアを融合させる手段としての A P E C、というのが先づ一つです。

第二に、私は中国との関係という意味で A P E C というのは、非常に大事だと思っております。中国はまだ G A T T とか W T O という世界のグローバルな貿易の組織には参加をしておりますが、加入交渉がもう十年近く続いているのですが、まったく結論は出ていません。

中国が W T O、或いは昔の G A T T の義務をどこまで守るか、ということでの議論となりませんが、外国貿易権が政府だけにあるとか、或いは輸入制限をしているとか、国内の規制が外国

から来た企業に対して勝手な差別をする、或いはそこにある国内の法律を含めた規制が良く判らないなど、ありとあらゆる問題点を抱えていること、それから更に個別の、例えば自動車などの関税の問題、或いは輸入品の数量規制の問題など、色々な問題があつて、中国はまだハッキリとした形で国際的な、自由な経済の仕組みが取り込まれていません。

ただ、だからと云つて交渉ができる前は全く中国を蚊帳の外に置いておくというのは、必ずしも世界貿易のために得策ではありません。やはり何らかの形で、少しづつでも取り込んでいかなければいけない、中国もある程度の自由化をしようとしていますし、先程申したような十枚のカードのうち五、六枚出そうとしているところに、結局十枚出さなければダメだという交渉をしているので、五枚すら出せないという状況にあるのです。

そこには APEC として、例えばカードを五枚づつ出し合ひしようということを、合意とまでは行かなくても、自主的にやろうという時に、中国が少くとも APEC の場だけはそういったより開かれた貿易経済関係に入っていく、そういう場を APEC というのは提供している、私は思います。

それと同時に、APEC という場を通じて、国際的なシステムに入っていくためには、責任あるメンバーになるためには何をすれば良いのかと中国に学習させるといふ、そういった効果もあると私は思っております。そういう意味で

中国との経済関係を国際的に引き出すという APEC の役割は大変大きいと思います。

(中略)

APEC というのは、関係レベルから低いレベルの会合まで色々ありますけれども、月に十ぐらいの会議は開かれていますし、だいたい一つの会議が三日から四日開かれているのですから、月に三十日と仮定すれば、一年に三百六十五日常に APEC の会議というものは開かれています。もちろんそれは色々な問題、例えば漁業とかエネルギーとか、或いは貿易のデータの交換であつたり、ありとあらゆる問題でありますけれども、そういったレベルでアジア太平洋地区の人たちは、毎日どこかで会つて、意志の疎通を図っている。そういった形でこの地域の将来を皆が政府レベルで考えるようになりました。

そのメカニズムというものを、我々はルールとしても行政としても尊重して行きたい。そういう意味で日本の対アジア太平洋外交にとつて APEC というものはこれからも非常に大事なもののなのです。

繰り返しますけれど、単に自由化をして関税が何%下がったという問題ではなく、この地域の対話を通じての共同体意識を醸成していくという意味での重要性というものは変わらず、益々重要になっていくことを申し上げて、私のとりあえずのお話とさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

(質疑応答省略)

地区だより

新友会(新川地区旅行会)

上海・杭州の旅

十月七日、十三時十五分、荻野地区長を団長とする新友会一行二十人は、薄曇りの上海国際空港に降り立った。一行を迎えたのは活気溢れる上海の空気。日本の昭和三十年代・四十年代の、何の疑問もなく経済成長につき進んでいった頃と同じ空気が鼻をついた。

休む間もなく、杭州へ出発。我々一行を待ち受けるバスは、日本ではめつたにお目にかかれないクラシクなバスで、この車で杭州までの約二百キロの道のりを五時間ほどかけてのバスツアーとなった。バスに乗った途端一行が驚いたのは前後、左右、そして我々のバスから発せられるクラクションの洪水で、それもそのはず、中国の交通ルールは弱肉強食、いかに他より前に車をつっこむか。又交差点での自転車や歩行者は信号の色より、車の間をぬっていかに進むかという技術を競っている。

我々が本当に驚き、次にあっけにとられ、最後に恐怖で口も聞けなくなったのはバスが杭州に向かう街道を走り始めてからだった。道の端は天びん棒をかついだ農民がのんびりと歩き、その内側は自転車、それを追い越すのは農耕機型軽トラック。それをぬうように中型、大型のトラックが走り、すきを見て我々のポロバス

がアクセルを全開にして必死に追い越そうとする(といっても時速六十キロ程だが)。そのパトロールは当然反対車線でも行なわれているため、二車線強の街道は、常に正面衝突の危機が致るところで生じるのである。ここでは、シューマツハもアレジも模範ドライバーと呼ばれるだろう。

恐怖のバスハイクも二時間、三時間と続くうちに、恐ろしさも徐々にマヒするものらしい。いつしかバスでしか味わえない回りの景色。人々の生活振りも目に入るようになってきた。上海から杭州までの道のりは基本的には農村地帯である。革命以前からと思われる粗末な農家が立ち並ぶ間には、共産国らしい労働者向けの中層のアパート群が目につき、外国との合弁と思われる超近代的な各種工場が立派な門と花壇、素晴らしく美しい建物を誇らしげに街道に向ける。

そしてどこにでもあるのが食堂である。さすが食の国と感心する我々にガイド謂く、男女平等、共稼ぎを原則とする中国は、台所を守る人間がいないうえ、どうしても外食が多くなり、朝食から食堂の世話になる、とのことであった。杭州市内の手前三十キロ程の所にさしかかると、突然艶めかしいイルミネーションに飾られ、店頭若くは女性が一人、二人と所在なげに座っている食堂が二・三十軒程現れる。案の定道を行きすぎるドライバー相手の、あいまい宿であった。古今東西存在する世界最古の職業がここ共産中国にも等しく存在していたことは、何



か人間らしさを感じて、ホッとしたのである。

さて杭州であるが「天上に極楽あり、地上に蘇州・杭州あり」と讃えられた二〇〇〇年余の歴史を持つ、山・湖・泉・庭園に囲まれた美しい古都である。隋の煬帝により大運河が開削されてからは、中国の南北をつなぐ重要な貿易と交通の拠点となり、九世紀からは十四人の皇帝

が次々と都を置き十三世紀には、「世界で最も美しく華やかな都」とマルコポーロが記述した通り繁栄をきわめた。

翌日、一行は杭州市内観光へと向かった。まずは修行者の心霊が隠れ住むという禅州の寺霊隠寺へ。木と土で出来た奈良の大仏よりも大きな大仏を拝観し、西湖へ。水深二メートル程、湖周十五キロの湖を古いそり屋根の中国の家がそのまま浮いているような観光船に乗り、白楽天や蘇東坡になった気分での中国を満喫した。

西湖遊覧の後は、平山郁夫や東山魁夷も訪れた篆刻研究室である西冷印社で書、絵画を鑑賞し、六和塔へと向った。今から一千年程前の建物で、高さ約六〇メートル。外観は十三層であるが内部は七階建てで一行の内数人が息を切らして最上階まで昇り、美しい眺めと、建物内部の精緻な彫刻を楽しんだ。この建物もレンガと木で造られており、地震のないこの地方の日本では考えられない建物構造に羨望を覚えた。

杭州市内観光を終えた一行は、夕方今度は列車で上海に戻った。恐怖のバスツアーから、退屈だがのんびりとした三時間半の軟座(グリーン車)の旅を終えて上海駅に着いた一行を迎えたものは、さすが世界の五分の一の人間が存在する中国の大都会、人、人、人の波であった。熱海駅のような旅館の客引き、地方からの出稼ぎ人や観光客が押し合いへし合い、その間に母親につれられたうす汚れた数人の子供達がしきりに我々に向かって手を差し出す。中には土下座までする子供たちもいて一元(日本円



で十二円位)、五元、十元とせしめていく。これも中国の一断面であろう。

三日目は上海市内観光に。まずは玉仏寺。上海市民の熱い信仰の対象であるこの寺は、やはり禅宗の寺院で清朝末期に僧 慧根がビルマより持ち帰った二体の白玉の釈迦像で、内一使は九十センチ程の涅槃像である。二体とも大変美しい仏像で、お顔はやや掘りの深いインド系の表情で、日本では見られないものである。

続いて豫園へと向った。到着以来何度となくガイドから受けた注意が、スリとニセ物売りに

気を付けるようにということであったが、豫園ではさらに迷子にならないようにとのアドバイスが加わった。豫園とは十六世紀の役人であった潘允瑞が商人として財をなし、両親に贈るために八年の歳月をかけて作った名園で、約六千坪の広さを持ち、尚かつ道が入り組んでおり、非常に迷子になり易い所である。そのうえ豫園の周辺はまるで浅草を思わせる街並で、レストラン、土産物屋が軒を並べ、大変な賑やかさで確かに大人でも迷子になるような大繁華街であった(かく言う私が、骨董に見とれ他の皆様にはぐれてしまい多大なご迷惑をお掛けしてしまつた)。

豫園の喧騒を離れ、長江の河口、黄浦江のクルージングの船上から、戦前の英国・米国租界フランス租界、そしてやや地味めな日本租界を遠望した一行は、上海旅行最後の晚餐を充分たんのうした後、上海バンスキンズ、恋とロマンと無国籍の二十年代、三十年代の郷愁が唯一残された場所、上海ジャズクラブへとくり出した。一行の中に多趣味で知られる石井夫妻の存在がこのナイトツアーを大いに盛り上げてくれた。

十月十日は帰国の日。午前中は思い思いの記念の品や土産物、特に今はやりのやせる石鹸を一人二ダースの制限で買い求めた後、中国要人、古くは毛沢東主席、今は江沢民等の中国要人の別荘、西郊賓館へ。上海で初めてほとんど人の姿を見かけない森の中の別天地であり、要人の静養の為の施設である。その施設の中に中国一の気こうの先生がいる治療院がある。見かけは

二十代にしか見えないその先生は実際は三十代後半でそのすぐれた能力で要人の治療に当たっている。中国の一般電圧である二〇〇ボルトの電流を体に流し気の力を強めての治療で、多くのメンバーが実際に治療を受けた。特に伊坂さんは強度の肩こりと腰痛ということで、真つ先に手を上げて体験なさり、治療後はスッキリした顔で感心していらした。

長い長い歴史と、大いなる経済成長の真つただ中にいる今の中国を、たつた四日で知ることとはとても不可能ではあるが、新友会一行二十人は、それぞれの驚きと楽しさと、感動の想い出を作り全員無事に帰国の途についた。

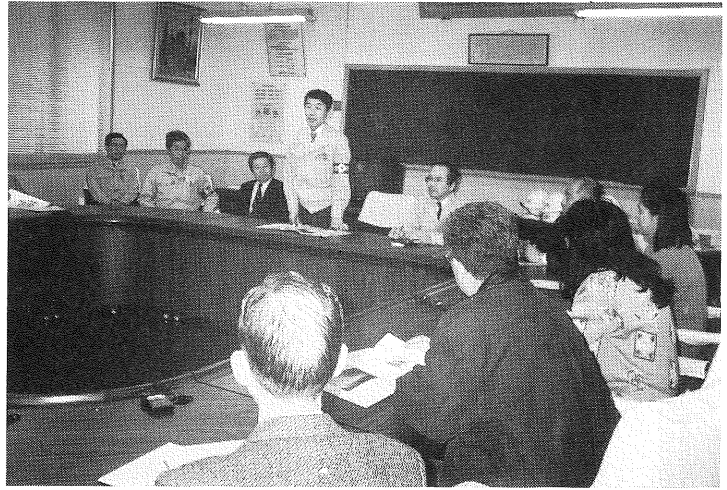
(堀江記)

月島地区研修旅行

— 東海パルプ(株)を見学して —

快晴に恵まれた十一月十一日(土)朝八時、メンバー十二名定刻どおり中央区月島特別出張所前に集合する。直ちにKM観光のサロンカーに乗り込み出発。

銀座ランプから首都高速に乗り東名自動車道へと順調に進む。車内では地区例会が岸地区長のリードで始まった。土曜日の午前中には珍らしく道路事情が良く、富士川SAに十一時に到着。トイレタイムで二〇分の小休止。その後吉田ICで東名を降り島田市街に入る。中心街のおそば屋さんで昼食をとり東海パルプ(株)に十二時三〇分に到着する。



東海パルプ(株)では伊藤工場長代理を始め二人の部長と東京営業所からも部長と課長が駆けつけ出迎えてくださる。会議室において伊藤工場長代理のご挨拶のあと工場のメンバーが自己紹介をしてそのおかしさに我々十二名も自己紹介をする。そして約一〇分の会社PRのビデオを観てから工場見学に移る。

最初は故紙を再生パルプにする工程を見学する。当日の原料は「自己の」と呼ばれるもので、これは我々印刷業者から出る残紙や印刷ヤレと

製本業者が出す断才機のタチくずだ。古新聞などに較べたらずっと白いものだが、まず水を加えるパルパーに送り込まれ、ドロドロに溶かされる。次に脱墨装置に二回通されてインキと分離されて再生パルプとなる。この再生パルプを使ったダンボールのもとになるクラフト紙の抄紙機を見学する。まずまずきれいなクラフト紙が出来上ってくる。

そして今度は本社から1kmぐらい離れた横井工場に移動して非木材系のパルプを原料とした製品を見学する。マニラ麻をパルプの原料にして、女性の顔のアブラ取り紙を抄いている小型な抄紙機を見て驚く。大型の抄紙機は何度が見学しているが、こんな小型でしかも小ロットで木材以外のパルプを使った製品は初めてだ。

一同大いに感嘆したところで工場見学は終了した。時刻は三時ジャスト。工場の皆さんに送られて伊豆長岡温泉に向う。沼津ICで東名を降りて今夜の泊り宿「安田家」に定刻五時に到着。

温泉で一汗流したところで、六時より懇親会を始める。工場見学の話題も豊富に飛び交い、カラオケを交えて結構盛り上がる。

翌日は近くの「かつらぎ山ロープウェイ」に乗りかたがらぎ山の頂上に立ち駿河湾と富士山を一望する。まずまずの眺めだ。沼津で昼食をとり沼津ICで東名自動車道に乗り一路月島へ。予定通り五時すぎに月島に無事到着。お天気に恵まれて良い研修旅行だったと思う。

(石井記)

支部の動き

1月5日(金)支部事務局仕事始め

1月10日(水)中央区工団連新年会(17時〜)於・中央会館

1月12日(金)本部新春の集い(17時30分〜)於・高輪プリンスホテル

1月18日(木)京橋支部新春研修会(18時〜)於・銀座東急ホテル「躍進するアジア諸国と日本」講師・外務省大使(国際貿易・経済担当)内田勝久氏

1月22日(月)豊島支部40周年記念式典 於・サンシャインプリンスホテル荒川支部長出席

1月24日(水)中央厚生事業協組新年会(18時〜)於・日本橋北浜 荒川支部長出席

1月26日(金)東製工組京橋支部新年会(18時〜)於・銀座東急ホテル 荒川支部長出席

2月1日(木)本部支部長会(15時〜17時)於・印刷会館 荒川支部長出席

2月2日(金)部長・監査・地区長会(16時〜)於・築地スエヒロ別館

1、支部長会報告事項

。本年度第4四半期の事業について

。機関紙「東京の印刷・支部特集」の順番について

特に巻頭のメイン記事、表紙、支部長インタビュー・支部随想を中心とした「支部特集」(京橋支部の表紙担当割案では

9年11月号)

。賦課金均等割額@一、六〇〇円↓一、八〇〇円で請求(廿八年4月より)

。新入社員養成講座(日本印刷技術協会と共催)日時4月2日(火)・3日(水) 1回目 4月4日(木)・5日(金) 2回目

会場 発明会館

。再販制度勉強会(出版印刷委員会企画)

日時2月20日(火)15時30分~17時30分

分

会場 電気工事会館7階(築地)

定員 二八八名 参加費 無料

講師 和久井孝太郎(電通・顧問)

。各種共済制度加入増強運動について

2月~3月 せつび共済(D.M・説明会等)、火災共済(重点支部上野・浅草)、全国生命共済(パンフレット、十月変更保険料表等)

せつび共済加入申込状況(京橋支部2社)

。平成8・9年度役員改選等についてスケジュール

2月21日(水)第1回推薦会議

3月7日(木)第2回推薦会議

3月21日(木)第4回理事会

4月4日(木)臨時総代会

。新総代リストの提出期限3月8日

。本部「新春のつどい」開催結果

。最低資本金制度改訂に伴う各支部内における対象組合員の対応状況

。売上動向調査(平成7年10月~12月期)

の中間結果報告

2、当面する支部事業

。新年臨時総会の役割分担の最終確認

。平成8年通常総会について、以下の通り決定された

日時 5月16日(木)

場所 銀座東急ホテル

会費 10,000円

なお、会場の関係で組合員とその後

継者及びそれに準ずる幹部社員を含めて

100名以上の出席を確保するよう努力

する。

。アウトサイダーの組合加入勧誘状況

。次回部長・監査・地区長会3月14日予定

2月2日(金)京橋支部新年臨時総会開催(18時~20時)於・築地スエヒロ別館

司 会 十文字副支部長

。開会のことば 関根副支部長

。あいさつ 荒川支部長

。議事 石澤委員長

次期役員選考委員会報告

その他

。来賓あいさつ

東印工組副理事長 田島一弥殿

中央区区長 矢田美英殿

中央区工団連会長 平林智司殿

来賓紹介

東製工組京橋支部長 岸田俊辰殿

中央区商工課長 斎藤宏文殿

中央厚生事業協組理事長牧野佐武朗殿

。閉会のことば 山崎副支部長

。新年宴会次第(18時40分予定)

。進行 中島副支部長

。あいさつ 荒川支部長

。関連業界代表挨拶

東製工組京橋支部長 岸田俊辰殿

。乾杯 京橋支部顧問 石澤 幸殿

。参加人数 支部組合員 68名

来賓 6名

。関連業界 39名

2月19日(月)支部打合せ(11時~)於・支部室

荒川支部長・十文字副支部長・関根副支部長・中島副支部長・山崎副支部長・石井副支部長・木島監査出席

2月19日(月)顧問・相談役・参与の会(12時~14時)於・支部室

。議題 支部組合事務所・会議室の維持について

。出席者 斎藤顧問・石澤顧問・小山相談

役・田島相談役・篠倉常務理事・榎本相

談役・大竹相談役・田島相談役・神林相

談役・長島参与・水野参与・佐藤参与

2月20日(火)中央区工団連合催・優良事業主・従

業員表彰式(15時~16時)於・中央会館

京橋支部より荒川支部長出席、事業主1

名、従業員13名受賞

2月21日(水)本部第1回推薦会議(14時30分~)

於・東京プリンスホテル

2月22日(木)京橋電気安全協合理事会(11時30分

12時30分)於・京橋消防署

2月23日(金)第2回次期役員推薦委員会(12時

14時)於・支部室、各委員9名出席

3月7日(木)本部支部長会(第2回推薦会議)

(15時)於・本部会議室

3月15日(金)中央区工団連見学会(9時~15時30

分)於・大日本スクリーン製造(株)工場見

学

於・伊東・いづみ荘

支部長会報告事項

報告にさきだち、荒川支部長より平成6

年度・7年度の支部運営に執行部への多

大なご協力に対し、稿のあいさつがあ

り、引きつづき以下の報告がありました。

。賦課金算定基準の見直し(平成8年度よ

り1,600円~1,800円)

。最低資本金制度改訂の周知・啓蒙

。加入増強運動

。組合員ガイドの作成

。業界イメージアップ事業・ビデオ・ポス

ター、PR冊子

。構造改善事業について・設備投資状況

。経営改善関係について

。小企業振興対策について

。資材対策について・値上り止り傾向

。教育事業について

。労務改善事業について

。環境保全事業について

。厚生事業について

。ネットワーク推進事業について

。構造高度化事業について

。プリンテック事業について

各種委員会報告

。資材委員会・上級紙等の価格上げ止り傾

向

。環境保全委員会・企業廃棄物のモデル回

取システム等

。生産技術教育委員会・通信教育、訓練事

項発表会、講座の開催

。当面する支部事業について

。本部・支部役員推薦委員会経過報告

。平成8年通常総会について

日時の確認・5月16日(木)(18時~19時

懇親会)、役割の確定

支部員の異動

加入組員

。(株)ユニットプランニング、岩間家富氏、

入船1-7-4(入船地区) 11月

支部転入

。(株)セイノグラフィックス、推名敏男氏

八丁堀2-29-14(八丁堀地区) 2月

脱退組員

。(株)アイセル、長島一麿氏(湊地区) 10月

。東京開拓社、加藤正秀氏(築地地区) 11

。内外印刷(株)、関口善次氏(八丁堀地区)

12月

。大沢印刷(株)、大沢将宏氏(入船地区) 3

月

お悔やみ申し上げます

▼新川地区、晶平堂印刷(株)年社長、和田栄介殿

御逝去(7月)

▼銀座地区、(有)小西商店印刷所、社長御母堂小

西はつ殿御逝去(11月)

▼八丁堀地区、(株)坂本印刷社、社長御母堂坂本

トミ殿御逝去(12月)

▼銀座地区、(株)興進社印刷所、社長御母堂小張

コヨシ殿御逝去(1月)

▼月島地区、(有)岸印刷所社長、岸京四郎殿御逝

去(1月)

▼入船地区、(株)亜土印刷(株)社長、青木綾子殿御逝

去(3月)

編集後記

住専処理問題も漸く国会審議の流れに入って
来ました。国内景気も昨年来の財政・金融政策
の効果で緩やかな回復が続いている等、明るい
記事が目に入るこの頃です。印刷業界も予断は
許されませんが用紙値上げにも、一部上げ止り傾
向が出て来ています。

今月号は、そのような明るい陽さしの見えて
来た時期での発行となりました。(横田)